

**Association for Research on the Impacts of War  
and Military Bases on Women's Human Rights**

**「女性・戦争・人権」学会**

ニューズレター 17号

2005年4月15日

巻頭言

志水紀代子

関西では造幣局の桜の通り抜けの季節、新しい年度がスターといたしましたが、発刊予定のニューズレターが遅れていて、4月半ばになってしまいました。

学会のプロジェクトとして、韓国の「戦争と女性・人権センター」との共同編纂で進めてまいりました「日韓女性による歴史教材」作りが、いよいよ終盤に入り、今年8月の発刊を前に、最後の詰めの作業に入っています。

この教材刊行の件と、6月に梨花女子大で、「世界女性会議」が開催されますため、学会大会も、例年の6月ではなく、時期を遅らせて、10月下旬に早稲田で開催予定を企画しています。いまのところ10月30日を予定していますが、会場が確定致しましてから、改めて大会案内をお送り致します。

さてお待たせしていた学会誌7号を、一緒にお届けいたします。巻頭言にも書かせていただいたのですが、「NHK問題」など、この間実践的に取り組んできたいくつかの活動が、本当に大きな日本のこれからの関わる問題であることがいよいよ明白になってきました。

折から、竹島（独島）問題が「韓流ブーム」に水を差し、歴史教科書の検定結果や日本の国連安保理常任理事国入りを巡って、中国でも反日デモが起こる中、あろうことか「新しい歴史教科書をつくる会」の副会長である藤岡信勝・拓殖大教授が、10日に「つくる会」の講演会で、「いま韓国では従軍慰安婦らが定期的に日本大使館前でパフォーマンスをしている。しかし彼女らは北朝鮮工作員という話を聞いた。自分もそう思っている」と述べたことを「中央日報」は伝えています。しかし同じ「中央日報」は、高橋哲哉さんが、民主的価値を実現するために抵抗する市民も少なくないと言ったことを大きく報道していました。（高橋教授は「学校で天皇を称える君が代を歌うことを拒否して懲戒を受けた教師、小泉首相の靖国神社参拝に抗議して法廷闘争を繰り広げる市民らが、政治的には現在劣勢ではあるものの、明確に存在する」とし、「日本の良心的市民は、韓国の民主主義のために奮闘する市民と東アジアの平和のために力を合わせることを切実に願っている」と語った。）（2005.3.31）

このような状況の中で、学会をどのようにしていけばいいのか、また皆様のご意見も伺ってみたいと思っています。学会誌についても、どうか忌憚のないご意見・ご感想をお寄せく



あのとき、薄暗かったその地下道には、そこを寝場所にしているらしい大人もたくさんいただろうし、私の記憶のなかに大人たちの姿がないわけではない。けれども、当時の私自身が幼い子どもだったからだろう、記憶のなかにより深く刻みこまれたのは<子どもたち>だった。汚れた衣服を着て、もつれた髪の毛、裸足の子も少なくなかったと思う。誰かからもらった食べ物をめぐってけんかしていることもあったが、年かさの子が年下の子どもたちに食べ物を分けているのを眼にしたこともある。

「なぜ、あの子たちは、あそこにいるのか」を、私は、母や父にたずねたに違いない。なぜなら、母に連れられてその地下道を通るとき、私のことを「見ている」——私には、そう感じられた——<子どもたち>は、私自身がもっとも失いたくないもの、失うことに脅えていたもの、父と母、粗末ではあっても洗濯された衣服、食べ物、帰って眠ることのできる家、寝床、それらを<戦争>によって奪われた子どもたちなのだということを知っていた。

今年、アジア・太平洋戦争における日本の敗戦から六〇年。しかし、あの戦争で子どもたちが被った被害、戦災孤児たちがどのような苦難を強いられたのか、日本国内に関してさえ、公的な機関による把握はなされないままだ。そして、実は、私が思い出す<地下道にいた子どもたち>の姿それ自体は、ぼんやりしたものなのだ。けれども、あの子たちの目、「見られている」と感じたこと、その記憶は薄れることはない。私を見ているあの子たちの目は、見上げるほどではなく、私よりほんの少し高い位置にあった。だから、たぶん、大人よりも、私の方が、あの子たちの目を捉え／捉えられたのだ。

記憶は単に<あるもの>ではなく、記憶を担おうとする者の意志によって、あるいは無意識の欲望によって<再構成>され続ける。<地下道にいた子どもたち>についての私の記憶は、戦争の犠牲にされた子どもたち、死んだ・殺された子どもたちが、国内だけでなく、日本が植民地にした地域にも大勢いたことを知り、さらに「中国残留孤児」と呼ばれる人びとがメディアで報道されるたびに、重ねあわされ、強度を増してきた。

私自身は<地下道にいた子ども>たちではなかった。だから、あの子たちの声を、私の声で篡奪すべきではない。しかし、<地下道にいた子どもたち>のまなざし、その記憶が、私にとり憑き、「戦災孤児」の目でこの世界を見るよう促す。戦争放棄した日本はこの六〇年の間に<日本国籍人>であれ<非・日本国籍人>であれ、「戦死者」も新たな「戦災孤児」を作り出してはいないが、世界各地で引き起こされている戦争・武力紛争は多くの人間を殺傷し、そして子どもたちから、人間として成長するために必要なものを奪い続けている。しかも、「憲法<改正>」が、第一条の廃棄ではなく、第九条の改変、戦争する普通の国家に向けてのそれが、国会議員や社会的な力をもつ財界人によって公然と語られつつある状況のなかで、私は、偶然によって「中国残留孤児」にも、「戦争孤児」にもならなかったが、かろうじてそうならなかった世代の日本国籍の人間として、「<地下道にいた子どもたち>のまなざし」を語る義務を負っている。

「あなたは誰？」

大越愛子

井桁さんからバトンを受けて、私の脳裏に焼き付いている鮮烈な戦後を語りたい。

皺に埋もれた眼差しをそれでも勝ち気そうにきつと見開いて、「あなたは誰？」と問いかける88歳の女性。「私はもうこんなに生きてしまった」と呟くあなたの60年は何だったのか。既に記憶がまだらになっているその人から、60年前のことを聞けなくなっているのが悔やまれる。

軍人の家の長男でありながら、既に結核に冒されていた哲学青年と結婚し、新婚時代を様々な人々が交叉する上海で過ごした。敗戦時には、病気の夫と二人の娘、そして無力な退役軍人の舅を抱えて、阿修羅のごとく働いた。市外に買出しに出かけ、警察の手入れが入ったから、列車から飛び降りて逃げたこともあったという。思い出す彼女の顔はいつも生き活きとしていた。家制度の重圧で泣くことの多かった戦前に比べて、なんと自由だったことか。

典型的な「女の戦後」である。私はあなたが、闇市を走り回って「買出し」の物資を売りさばっていた時期を知らない。だが女高師進学希望を兄のためにあきらめ、そのため戦後教員試験を受けられず、小学校の事務員であったこと、「女」でも経済的に自立しなければと言いつづけていたあなたの言葉を覚えている。

そして「未亡人の戦後」。夫と舅が死んだ後、女世帯となった家に、学校の宿直をしていた教員が深夜へべれけになって押しかけ、どれだけ情けなかったかとあなたは言う。当時民主化とは裏腹に、学校内にヒエラルキーが厳然としてあり、あなたは逆らえない位置にいた。

さらに「日本人としての戦後」。近くに在日朝鮮人の方たちの集落があり、さまざまな交流があったが、あなたの態度が差別的でなかったとは、とても言えない。映画『パッチギ』で描かれた京都の戦後。そこで「日本人」たちは、子どもたちの間を鴨川で引き裂いていた。

さまざまな矛盾をすり抜けて、あなたは生き抜いた。日教組のシンパとして勤評闘争を支えた「左翼」の端くれであったが、自己中心的で、男性に従属的。そして無類のハリウッド映画好きで、異性愛主義。しかしあなたの一見たくましい軌跡は、80年代に失速した。その後心の病に苦しみ、それに自他を巻き込むことになる。

あなたの戦後に、「日本の戦後」がだぶって見える。国家や社会によってだけでは語り尽くせないもの。とって女の一代記を語ることで見えるわけでもない。あなたの生と性を構成していたもの、その都度偶然的に遂行された行動によって切り裂かれていった風景を、いま事後的に解釈することで、「戦後」の意味が浮上してくる。

まだらになったあなたの記憶。そこにはあなたが忘れたいに違いない事柄が、数多く沈殿しているのだろう。その沈殿しているものを、非情に拾い上げねばならない。今だからこそ露呈してくる、「戦後60年」という虚構を読み解くために。「物語化」を許さないために。

神様なもんか！

中原道子

私は愚鈍な子供だったに違いない。敗戦の年のお正月には十歳だったが、天皇は神様だと信じきっていたのだから。だが、その愚鈍な子供ですら、日本が勝っているとは信じられなかった。食料は配給だが、いつもお腹がすいていた。敵機B29が自由に東京を飛び回って

た。敵機が撃墜されたという話は聞いたこともなかった。何故神様のくせになにも手を打たないのか子供ながら不思議でたまらなかった。私はある日、祖母に、天皇陛下は神様なら何故敵をやっつけないの、と聞いた。その時、祖母は一言吐き捨てるように「神様なもんか！」と答えた。その苦々しい、あざけるような口調は、まさに青天の霹靂のごとく私をたたきのめした。私の祖母は、いい着物をきて、おいしいものを食べて、芝居でも見ていればそれが幸せという人だったから、その全てを奪った戦争なんかそ食らえと思っていたのだろう。私は憑きものがおちたように、私なりに納得がいったのだ。神様でないことは次々に証明された。

私の家は2月のおわりの空襲で焼き払われた。焼夷弾がふりそそぐなか、火の中を逃げた私は、炎に包まれて崩れ落ちる生まれ育った家を、信じられない気持ちで見ている。家もやかれ、東京から長野に疎開をした。従兄弟のKは徴兵され、南のどこもしれぬ戦場へ行きつく前に海に沈んだ。まだ20才にもなっていなかった。その頃には、なにもしない神様を私は見限っていた。戦争というのは、兵士以外の人々にとっては、日常のなかで、ある日、一方的に殺されるのを待つということなのだ。

学校の教師は、戦争が負けると、なんの説明もなく、軍国主義者から民主主義者に衣替えをして、昨日まで、金科玉条のごとく教えていた教科書を、子供たちに墨で一行一行消す作業をさせた、何の説明もなく。焼け野原の東京にはやけたトタンの掘っ建て小屋が建ちはじめた。私たちは東京にもどったが、私の通った小学校は、千住のお化け煙突のそばで、近くに柳原の遊郭があった。何故か、授業を受けた記憶が全くない。先生は忙しかつたらしく、私は6年生の時、クラスで教えていた。私のカリキュラムは音楽、体育、数学、国語でそれ以外のことは教えなかった。オルガンをひいてみんなに歌を歌わせたり、ダンスを教えたり、好きなことをしていた。地理は苦手なので教えなかった。いまだに私の地理の知識は幼稚園レベルで、突然、エヒメケンなどと言われてもとっさにどこにあったのかとまどう。(エヒメケンの皆様ごめんなさい。)

天皇も学校の教師も、私にとっては立派な反面教師だった。彼らが私に唯一教えたことは権威の虚構と言うことだった。1945年から55年目に、「女性国際戦犯法廷」と関わって天皇裕仁の戦争責任を裁くことになろうとは、その時は知るよしもなかった。

\*\*\*\*\*

会員の皆さんに、戦後60年についてのリレー・エッセイを募集します。次号のニューズレターに掲載したいと思います。メールで、事務局へお送り下さい。連絡先は最後にあります。

\*\*会員の皆さんに戦後60年についてのアンケートを実施したいと思います。

①戦後60年の現在、私たちはどのような状況にあるのか、新たな方向性は拓かれるのか？



流れてゆくことも十分に予想できるし、そこには注意を払っていく必要があるだろう。

最後に先日の新聞報道によれば、旧ザイル、カンボジアなどに派遣されたPKO要員による現地の女性への性的搾取事件が2004年だけで105件発覚し、そのうち45%が18歳以下の少女が相手のそれだったとのことである（毎日新聞、3月26日）。少女への性的暴力は、およそ「ロリコン」とは関係のなさそうなシーンでも起きてきたし、現に起きている。本書で展開された特殊日本的なロリコン現象とそうした事例はどこが重なり、どこが違うのか。より幅広い視点からの分析と、そして批判が必要だろう。

#####

<会員が出された本で、送って頂いた本、書店で見かけた本>

会員が出された本で、送って頂いた本、書店で見かけた本を紹介します。書評募集しています。出版された方は事務局にお知らせ下さい、次号に掲載します。

・『**継続する植民地主義**』中野敏男他編、青弓社、（はじめにより・・・「植民地主義はつねに<現在>のものとしてあり、そのため<植民地主義>とは何か」というこの問いは決して終わることのない<問い>として、説明や解明などしつくせない絶対的な問いとして私たちの前に横たわる。）中野敏男「東アジアで<戦後>を問うこと」、金富子「植民地期・解放直後の朝鮮における公娼認識」、宋連玉「在日朝鮮人女性とは誰か」、徐京植「怪物の影・「<小松川事件>と表象の暴力」他。

・『**労働のジェンダー化**』池内靖子・岡野八代他編、平凡社（帯より・・・制度化された<労働>の批判、家事労働からセックスワークまで、労働のなかの<女/男>をジェンダーの視点から分析する制度・言説・表象の政治学）池内靖子「セックスワークの脱神話化?」、岡野八代「労働の両義性とジェンダー化」、金友子「日本軍性奴隷制と（再生産）労働概念の再一構築」、イダヒロユキ「わたしにとってのアンペイド・ワーク論」他。

・『**女たちの戦争責任**』、長谷川啓他編、東京堂出版（帯より・・・女性みずからが問う女たちの戦争責任！最新のジェンダー批評で検証する15年戦争下の女たちの動向）鈴木裕子「日中戦争とフェミニストたち」、長谷川啓「<美人>作家の効用、大越愛子「天皇制イデオロギーと大東亜共栄圏」

・『**軍事組織とジェンダー**』佐藤文香著、：慶應義塾大学出版会（カバーより・・・日本の軍事組織・自衛隊及び防衛大学校をめぐるジェンダー・イデオロギー研究。はたして、軍隊への男女共同参画は、究極の男女平等のゴールなのか?）

・『**教育と国家**』高橋哲哉著、講談社（カバーより・・・教育基本法は学校教育制度を自明の前提としている面では問い直されるべきですが、それは現在の改正論とはまったくレベルの違う問題なのです）

・『**友人主義宣言**』佐藤和夫著、はるか書房（帯より・・・恋愛・家族至上主義を超えて新しい男女の関係やライフスタイル、家族の形を大胆に提示する著者渾身のマニフェスト）

・『**竹中恵美子が語る・・・労働とジェンダー**』関西女の労働問題研究会他編、ドメス出版





き、コメンテーターの発言が大幅にカットされ、被害者証言も縮小され、加害者証言及び判決内容は全く削除されるなど、改竄が歴然としたものでした。

これは視聴者の「知る権利」を冒瀆し、現場制作者・編集者の「表現の自由」「報道の自由」を侵犯する許しがたい行為です。このNHKの背信行為に対して「法廷」主催者であるVAWW NET Japan は、裁判に訴え、その訴えが大筋認められる一審判決を勝ち取っています。それにもかかわらずNHK側は、海老沢前会長の専横の下にこうした訴えや判決内容を無視し続けてきました。その間、NHK 内部で番組作りに関わった人たちも悩み、苦しみ続けてきたことは、長井発言で明らかとなりました。こうした良心的な声が、再び権力体制によって踏みにじられることがあっては断じてなりません。

しかるにNHKは、この問題が明るみになった後も、真相究明をするどころか、たった一日の調査と幹部の一貫性がなく信憑性の乏しい発言で居直っています。そして、この問題を報道した朝日新聞社攻撃へと問題をすり替え、公的な情報を流す時間であるニュースの時間を、数分間も社の私的な不祥事の隠蔽とすり替えのために使用しました。また問題視された政治家の発言を、何の論評もなしに一方向的に垂れ流すという異常な行動に出ました。これは、公共放送において決してあってはならない逸脱行為です。

1月22日に開かれた『前夜 in 関西』の集まりにおいて、こうした事態に抗して、参加者の有志からは明確な意思表明を行なおうとする呼びかけがなされました。NHKへの申入書を作成し、有志で主にメールを使って呼びかけました。短期間ではありましたが、302名の方からの署名が集まりました。2月2日に、申入書と署名名簿を持って、NHK大阪放送局に15人のメンバーが出向きました。申し入れ内容は次の5点でした。

- ①自社の不祥事の隠蔽とすり替えのために、ニュースの時間を占有することは即刻中止すること。
- ②問題の本質を明らかにするために、「問われる戦時性暴力」を再放送し、その改竄前のフィルムも放映すること。
- ③国会でスムーズに予算案を通してもらうなどの理由で、番組放送前にNHK幹部が政治家に会い、有形無形の圧力によって番組を改竄した疑いが強いことに関して、真相を明らかにし、責任を認め、視聴者に謝罪すること。関与者をきちんと処分すること。
- ④内部告発者に不利益な対応をしないこと。今後このような告発があったときに、直ちに適切に対応し、視聴者の権利を守ること。
- ⑤今後、政治家や政党の介入に左右されることなく、視聴者の「知る権利」、報道関係者の「表現の自由」「報道の自由」を堅持すること。

しかしながら、対応したNHK側の広報幹部は、私たちの質問に対しても、公式見解を繰り返

返すのみでした。やりとりの中で、彼らが問題のテレビを見ていないことが明らかとなったことに対して、NHKは国営放送ではなく、視聴者からの受信料で成り立っている公共放送なのだから、一番大切なのは視聴者ではないのかと、私たちは問いました。自分たちが見ていない番組に関する問い合わせに、視聴も調査もしないで、上からのお達しを鵜呑みにしてしますのは、ジャーナリストとしての基本に反していると思えません。

改竄がないと言い切るのなら、放送された番組内容と、それ以前に収録されているものとをどう違うか視聴者が判断するため、再上映してほしいという要求に対しても、番組再上映に関しては、東京の問題なので、お答えできないと、東京の権力者に何でもお伺いを立てるといふ中央志向の体質がもろに暴露されました。

申入書の回答は、2月14日付けで届きましたが、公式見解を繰り返しただけでした。NHK側の弁解をNHK放送を使って行うのに何が悪いという、居直り回答に対して私たちはよりいっそうの怒りと失望にたえません。私たちは今後も様々な形で抗議を続けるとともに、政治家やNHKがこれほどまでに怖がる「女性国際戦犯法廷」の画期的な意義を、内外に伝えていくことを決意します。

2005年4月9日

「NHK番組改変問題を考える」集会参加者一同

@@  
@@@@@@@@

**編集後記** <諸事情でニューズレター17号発行が遅れたことをお許し下さい。戦後60年に関する・エッセイ・アンケート、ぜひご協力下さいね。連絡先は下記のとおりです>

**学会連絡先** E-mail ; aikoo@msa.kindai.ac.jp  
HPアドレス <http://www.war-women-rights.jp/>  
〒577-0818 大阪府東大阪市小若江3-4-1  
近畿大学文芸学部 大越愛子研究室 TEL06 (6721) 2332 (代表)

<追伸>  
2005年度の学会費振り込み用紙を同封させていただきました。入れ違いで入金された方ご容赦くださいませ。各自で金額をご記入の上、振り込んで頂きますよう、お願い致します。

- 維持会費 10,000円
- 一般会費 6,000円
- 学生会費 3,000円

通信欄を利用して、学会へのメッセージをお寄せください。お待ちしております。